

ロボット補助下腹腔鏡下前立腺全摘術後の 鼠径ヘルニアに対し TAPP にて修復し得た一例

岩手県立宮古病院外科

細井信之、川村英伸、宮本将秀、中村侑哉、藤社勉

症例は 75 歳男性。5 年前に前立腺癌でロボット補助下腹腔鏡下前立腺全摘術＋骨盤リンパ節郭清術(RALP+eLND)を施行され、術後前立腺床に外照射(66.6Gy)施行されていた。2 年前から左鼠径部膨隆を認め痛みを伴う為、当科受診した。左鼠径ヘルニア、腹部に RALP 手術瘢痕、左鼠径部から下肢にリンパ浮腫を認めた。RALP による腹膜前腔癒着が予想され鼠径法によるアプローチを検討したがリンパ浮腫もあり手術はハイブリッド手術も考慮し TAPP 施行した。左 L2 型ヘルニアを認めヘルニア門内側に瘢痕化を認めた。腹膜前腔に到達可能であるも Cooper 靭帯周囲の癒着著明であり剥離困難であった。可及的にヘルニア門周囲剥離し mesh を展開し外側腹膜を内側に牽引してメッシュが露出しない様に縫合閉鎖し近傍の結腸垂をパッチとして縫合し補強とした。術後再発なくパス通り退院となった。若干の文献的考察を加え報告する。